

靴の歴史散歩 ⑨5

皮革産業資料館 副館長 稲川 實

前号で、明治40年（1907）の大塚製靴の型録から、扱い商品の「舶来ゴム長靴」の紹介をさせていただいたが、そこで紙数が尽き、値段の話にまで入れなかったのが、今号へと続けたい。

表記の値段によれば、輸入ゴム長靴は、七圓五十銭から九圓とあるから、その高額な値段には驚かされる。同時代にボックスカーフの高級紳士靴が、5円から7円で買ったのだから、普及にはまだほど遠い商品であったことが分かる。

ゴム長靴が、国産化と量産によって、大衆の履き物になって行く変遷は、例の『値段の風俗史』によって辿ってみたい。

《ゴム長靴》

▶大正13年 4円▶大正14年 5円50銭
▶昭和元年 5円▶昭和5年 5円20銭▶
昭和6年 1円80銭▶昭和7年 1円45銭
▶昭和12年 3円（以下略）

昭和5年の5円20銭に対し、昭和6年では1円80銭と、大幅に安くなっているから、昭和5、6年には各地にゴム工場も出来、量産化も進められた、と読むことができる。それにしても、これほど劇的な価格変動は、業界にも大きな混乱があったものと思われる。

さて、簡単そうで意外に難しい宿題、看板の字「鞍」について解明しておきたい。

難しい漢字に出会ったら、これに頼ろうと、図書館でいつもマークしていた『大漢和辞典』（全十五巻 大修館書店）というのがある。その12巻から「革部」の頁をコピーしたら、「二畫」から「二十九畫」まで、なんと396文字もあったのには、びっ

くりしてしまった。圧倒的に馬具に関する用語が多く、問題の「鞍」も、「ひ」又は「び」と読み、その意は①「車に駕した飾り」②「ひきづな」③「くらのおほい」④「たづな」⑤「はらおび」とあって、全て馬具、車駕具ということが分かった。

いつも読んで下さって、親切にご教示をいただいている孫田良平さんからも、同様の趣旨のお手紙を頂戴している。

「洋馬具鞍靴類商」と等間隔に書いてある看板を、靴メーカーだった身びいきから、勝手に鞍と靴をくっつけ、読んでしまった私のミスが災いしたようである。

そうだとしても、看板を声に出して読むとしたら、どう読むんだろうと考え、少々歯切れは悪い。



名古屋 金城商会のポスター（昭和10年頃）
タテ78cm×ヨコ54cm